



第13回日本禁煙推進医師 歯科医師連盟学術総会

日本禁煙推進医師歯科医師連盟北海道支部長 佐野文男
札幌社会保険総合病院長

この学術総会は毎年1回2月に行われているが、北海道で初めて開催されることになった。会期は札幌雪まつり期間中の2月7日(土)午後・8日(日)午前の2日間、札幌市医師会館を会場に行われた。札幌社会保険総合病院が担当して運営されたが、プログラム委員会は北海道支部の役員が中心となって構成され、プログラムが決定された。1日目は「未成年者の喫煙防止を進めるために」をテーマとして市民公開講座が行われ、200名の参加があった。演題数は大会長講演、特別講演2題、シンポジウム1題、一般演題35題、計46題となり、これまでの最高となった。大会長講演として「禁煙対策の取り組みを振り返って」と題し佐野文男大会長が、特別講演として「日本禁煙運動史」と題して黒木俊郎北海道禁煙週間実行委員会幹事長(弁護士)が、「スリランカにおける禁煙対策」と題して千葉逸朗北海道医療大学歯学部教授がそれぞれ講演した。千葉氏は今話題になっている噛みタバコによる口腔がんのスリランカにおける現状についても報告し、聴衆の高い関心を引いていた。

シンポジウムとして「未成年者の喫煙防止を進めるために」のテーマで大島明日本禁煙推進医師歯科医師連盟会長の基調講演に引きつづきシンポジストによる6題の講演と討論が活発に行われた。

北海道支部会員の発表としては、大見広規(上川保健所)が「医師による未成年者に対する禁煙指導 一医師の意向と養護教諭の期待」、遠藤明(えんどう桔梗クリニック)が「親への家庭内禁煙教育」と題してシンポジストとして発表した。また、一般演題では宇加江進(札幌社会保険総合病院)が「札幌市の小中学校教師の喫煙状

況」を、原田正平(池田町立病院)が「北海道における学校の禁煙対策に関する調査」を、大見広規(上川保健所)が「保健所の講師による高等学校での喫煙防止教育の効果」を、亀倉更人(北海道大学歯学部)が「大学における禁煙教育ならびに禁煙化状況に関する調査」を、清水央雄(北海道かもめ歯科)が「我々はどんな活動を行うべきか」を、遠藤明(えんどう桔梗こどもクリニック)が「親の喫煙が胎児の子宮内発育におよぼす影響」を、廣田洋子(北海道千歳保健所)が「看護職の喫煙状況と喫煙に対する考え方(現職と学生の比較)」を、三橋公美(札幌社会保険総合病院)が「入院した喫煙患者に対する禁煙支援の有効性について」を、安田卓二(札幌社会保険総合病院)が「すべての医師が担当するための禁煙外来のマニュアル化」を、今野美紀(札幌医科大学保健医療学部)が「小児科外来における受動喫煙防止の看護援助の検討/母親へパンフレットを用いて」を発表した。

1日目豊平館で会員懇親会が行われたが、150人を超える盛況となり、オカリナ・フルート/ピアノ演奏と共にシェフらによる道産食材をふんだんに使った料理と地酒、ラーメンなど札幌の夜を十分に楽しみ交流の輪を拡げた。

昨年5月に健康増進法が施行されてから、禁煙推進の活動は追い風を得ているが、率先して推進する役を担うべき医療界においてもその実態は不十分といわざるをえない。本学術総会が、禁煙推進の一助になれば望外の幸である。

今回の学術総会の開催に当たり北海道、札幌市、北海道医師会、札幌市医師会をはじめ諸団体にご支援をいただいたことを紙面を借りて深謝する。